

大腸がん検診（職域）

動 向

大腸がんは食事の欧米化等により、日本人に増加傾向が顕著ながんであり、発生部位はS状結腸と直腸に集中している。近年検診の有効性が理解されて普及がすすみ、受診者は順次拡大している。平成17年度の職域における受診者数は、昨年度より2,081名増加し、56,877名となった。

当協会の大腸がん検診は、一次スクリーニングに免疫学的便潜血反応検査2回法と自覚症状を主とする問診を、また精密検査として内視鏡検査と大腸X線撮影を併用しており、診断精度の高い効果的なシステムを構築している。

大腸がん精密検査の結果は表4に示すように、受診率は19.8%と低いものの、精密検査受診者342名中、大腸がん9名（発見率2.6%）、大腸ポリープ153名（同44.7%）等が見つかり、高い発見率を示している。

大腸がんは、早期発見により治癒しやすいがんと言われており、定期的な検診の更なる普及、拡大を図るべきと考える。

なお当協会では、18年度以降大腸の精密検査を原則実施せずに、信頼のおける外部の専門機関を紹介していく方向で検討している。

方 法

大腸がん検診のスクリーニングは、免疫学的便潜血反応検査による便の検査を二日間連続して提出する二日法と問診票からのチェックで対象者を選別している。

精密検査の内容は全大腸内視鏡検査と大腸造影検査の併用法で実施している。併用法の特徴は1回の前処置で二つの検査が可能であること、もう1つは大腸内視鏡検査と大腸造影検査のそれぞれの欠点をお互いに補完しあい見落としを少なく出来ることが最大の特徴である。

結 果

平成17年度の職域大腸がん検診の実施数は表1に示すように56,877名、男38,121名、女18,756名である。前年度よりやや増加している。

検体提出数は表2に示すように検体不適は無いが2日間採取し提出したのは45,906名で残り10,971名は1日のみ提出であった。このうち便潜血反応検査で陽性を示したのは6.1%、問診表からチェックされた人は0.5%。便潜血反応検査の陽性者の内訳は2日間連続（+）は598名であった。

当施設で実施する精密検査の対象者（表3・Aグループ）は26,819名、男17,869名、女8,950名で要精密検査は6.4%の1,725名である。その内訳は1,562名が便潜血で、163名は問診表からである。実際に精密検査を受診したのは、男255名、女87名合計342名で要精密検査者に対して19.8%の低率である。ここから発見された疾患は大腸がん9名、大腸ポリープ153名、結腸憩室107名、内痔核が89名である。

便潜血反応検査陽性から見た発見疾患は（+）・（+）の二日間陽性者からの発見大腸がんは3名7.0%を示し前年度13.4%を大幅に下回り、大腸ポリープも19名44.2%を示す。1回だけ陽性となった人でも5名、1.8%の大腸がん発見があった。また大腸ポリープは123名45.4%を示した。便潜血反応検査では（-）であったが自覚症状があり要精密検査になった人の中からも癌は1名発見された。

これらの事からも大腸がん検診で注意しなければならないことは1回でも便潜血陽性になったら、必ず受診を進めることである。

また問診からは大腸がんを1名発見できたことから今後問診票の見直しも検討する必要がある。また、便潜血陽性者の受診状況でも潜血（+）の受診状況は低率で精密検査に対する解説或いは説明不足から十分な理解が得られてないのではと考えられる。

関係の集計表は74頁に掲載